

特別活動を通して低学年学生の自主性を育てる試み

—二年生修学旅行の実施から—

宮坂忠昭*・中村護光**・曾田友紀子***・内山了治****

AN EFFORT TO CULTIVATE POSITIVE ATTITUDES AND INDEPENDENCE IN SECOND YEAR STUDENTS

— Guidance through school excursion —

Tadaaki MIYASAKA, Morimitsu NAKAMURA, Yukiko SODA and Ryouji UCHIYAMA

We defined the aim of our 1996 school excursion as follows: "to have the students actively participate and thereby become more mature and independent." In order to meet this goal, we, the group of 2nd-year homeroom teachers, gave much thought to preparatory guidance as well as to guidance at the site, by giving the students as much time as possible to plan and prepare for the trip themselves. We hope our guidance will be a step toward fostering their attitude of self-management. Through this experience, it seems to us that they have come to realize that they are expected to behave differently from the way they used to and that they should be sympathetic to their friends and the homeroom to which they belong. They also seem to have understood the difficulty and importance of getting along with others. Above all, this travel has been a priceless experience to those on the excursion committee who had to lead classroom students. We are sure our effort will be a good example when we think of the purpose of extra curricula activities as well as of school events.

キーワード：特活，修学旅行，自主性

1. はじめに

(1) 長野高専の現状

1) カリキュラム

全国でも同様の傾向を示すと思われるが、本校においては、一・二年次のカリキュラムは高校以上に余裕がなく、限られた時間内に多くの教育効果をあげようとする教官の熱心さがかえって学生の自主的、主体的な取り組みへの意欲をそぐ結果となりがちである。高学年では、レポートや課題、卒研等に追われる学生にはゆとりは感じられず、優秀で熱心な学生ほどさまざまなコンテストや資格取得に追われ、一層忙しい日々を送っている。5年間一貫教育の利

* 基礎専門応用物理 教授

** 一般科教授

*** 一般科助教授

**** 一般科助教授

原稿受付 1997年9月30日

点である受験戦争や就職難にみまわれることのない高専教育とは裏腹に、学生は時間に追われ自主性を喪失しながら学校生活を送っているようにも見える。

2) 特別活動の必要性

一方、午後4時以降と週末の限られた時間内で、精一杯部活や同好会活動に取り組み、有意義に過ごしている学生も多い。それはあくまでも各人の主体的選択に基づく対象にのみ向けられている意欲であって、クラスとか学年という所属集団における自己の抽象的な存在に対しては概して無関心である。

これらの傾向は高専生だけの特殊なものではないが、彼らの置かれている教育環境が三無主義などの特徴をより顕著にしている。与えられたノルマを効率良くこなし、そつなく無難に問題を解決していくという長所は、自発的発想による立案、個性的な実行力の必要な行動、曖昧で考えにくい問題解決などには手をつけたがらないという短所ともなる。このことは、素直ではあるが面倒くさがり、言われたこ

とには忠実だが、自分からは動かないという「指示待ち人間」が多いといわれる所以であろう。だが、その責任は彼らだけに帰すべきなのだろうか。この現実から出発するとしたら、教官や学校の側では何をなすべきなのであろうか。

彼らが失いつつある帰属集団、すなわちクラス、学年、ひいては学校での連帯感や協調性、社会性及び自主性を養うために、教官や学校は何をなすべきかという課題につきあたる。

本校では創立以来修学旅行を実施してきたが、平成8年度第二学年は特にこれら上述の現状認識の上に立って、低学年において、学生の自主性を育てることに教育力点を置いた実践的教育として修学旅行を実施したので報告する。

(2) 本校の修学旅行

1) 教育的意義づけ

本校の数年前の調査によれば、関東信越地区の高専で修学旅行を実施しているのは本校のみであった。全国的にも、修学旅行のある高専というのは希少な存在であろう。社会の変化に伴う修学旅行の意義の希薄化、学生の質的变化により増大する学校側の精神的負担、5年間一貫教育を標榜する高専教育における「修学」のかかえる矛盾等々を考えあわせれば、本校の独自の試みとして、その意義づけはなされねばならない。しかし、この意義づけは数々の実施を経て、年々変化してきたが、おもに次の二つがあげられる。

① カリキュラムの延長上としての位置づけ

- ・日本の歴史、文化遺産の学習
- ・理工系の学校として工場見学的性格

② 特別活動としての位置づけ

- ・学生の相互理解、友情の深まり
- ・社会人としての徳育性、社会性、自主性の育成
- ・国際人としての開かれた視野の養成

その柱が「教育」にあることは言うまでもないが、その質を問うと、存外旧態然としている。

もはや、見聞を広めるとか親睦を深めるとかの中学校の延長線上にある目標を掲げる年代ではあるまい。少なくとも、情報量や経済面の豊かさから考えると一昔前の旅行の魅力は失われている。本校では、高学年次に工場見学が毎年実施されているが、その目標と一線を画する修学旅行にどのような教育目標を求めべきか、常に議論され研究されてきた。ここ数年、「よき技術者であるためには、よき人間でなくてはならない」を目標にしながら①の意義づけを兼ねながら、②の社会人としてのマナーを学ぶ機会として、修学旅行を見直してゆく動きがある。

2) 実施上の問題

従来、企画から実施計画の決定までの過程のほとんどすべては、担当教官及び事務官と、旅行業者との相談や交渉に委ねられてきた。160~200人のホテル確保や長野県の交通事情もあって1年以上前から準備を始めても、余裕のない決定を余儀なくされる実情がある。したがって、見学コース自体が事前の決定事項であり、学生達にとっては既に決定されたコースで準備を求められる。彼らが自主的に参加する要素はほとんど見当たらない。学生は与えられたメニューを消化し、感想を述べあうだけに終わってしまうのである。特に、長野県の地理的性格上、目的地までの移動時間の長さは学生が現地で行動する時間を大きく制約し、見学は可能であっても、体験として深められないまま終わってしまう場合も多かったと考えられる。

2. 修学旅行を自主性を育てる機会と位置づけて

(1) 学年準備会

本来学年会は4月の第1回教官会議で校長の委嘱があって発足すべきものであるが、実際は、そのスムーズな学年運営のためには前年度中に学級担任の内示があって新たな学年準備会を発足させている。本学年は、更に一層この準備会の発足を早める必要があった。それは前年の教官会議で、「過去の第二学年の修学旅行の実施時期が、学校行事の連続で教育指導上問題があり、春期に実施時期を移動しこれを数年間試行した上で、再検討する」との意見集約がなされていたからである。このため、修学旅行を例年通り実施するならば、宿舍の確保、輸送機関の予約等の諸手配は、見学先が人気のある場所ならば、遅くとも1年前にしないと、希望のプランの実行は不可能となる。この為、次の手順で修学旅行の準備を開始した。

①平成7年1月下旬に学年準備会を発足させ、修学旅行の実施を決定、旅行係を内定した。

②修学旅行の目的、方針、方面、期日について基本的な意向をまとめ、係が計画の概要を作成し、学年準備会の承認を得た。

③旅行積立金額は、秋の実施に比べ、ほぼ半年分の減額となる。この為、係、学年主任、学生課で協議の上、この減額分を各月の積立金に2,000円上乘せした。

④従来の修学旅行取扱いに実績のある3社に説明し、計画の目的・趣旨、概要にそったコースの具体案、宿舍、旅行費用等の見積の提出を依頼した。

⑤学年会及び学生課の合同会議で、各社より提出された見積書を比較検討し、総合評価により取扱い業者を決定した。

以上の手続きは、新学期スタート前、担任委嘱前の仮決定であったため、年度開始直後修学旅行実施案及び旅行取扱業者の再確認を行い、校長、教務主事の正式な承認を得るとともに、事務サイドの分担の遂行を依頼した。

(2) 目的設定

学年準備会は、前述のこれまでの修学旅行の反省に鑑み、学生が自主研修を自ら計画、立案するという主体的行動を通して旅行に参加することにより、彼らの自主性や社会性を伸ばすことに最大の重点を置いた。この為には、「連れて行ってもらう」のではなく自らがプランニングし、また、見学者ではなく実行者としての旅行にする必要がある。そして彼らが体験を通して旅の面白さを知り、友人と親しみ、視野を広めることを願った。また、今後彼らの生きる社会は21世紀の国際化社会である。異文化理解が国際化社会への対応には不可欠であるが、その為には自らのアイデンティティをきちんと備えた国際人であってほしいことも願った。また、わが国の文化の理解を深め国際人としてのセンスと教養を身につける機会にすべきであるとの提案もあった。さらに核家族化、少子化等により、集団行動の場が少なくなっており、この旅によって、団体の一員としての責任と自覚を育成することも目的の一つとした。以上のような意向により、表1のような具体的行動を提示した。

基本案作成途中で、当初産業見学先として琵琶湖の治水事業を学習できる建設省の施設アクアピア、琵琶湖の環境浄化をテーマとした滋賀県の水博物館を予定していたが、いずれも予定していた日程が休館日であり、また自動車工場の見学も候補に挙がったが距離的、時間的に無理があったため、このような産業見学は、三・四年次にまかせることにした。これに代わって、比叡山延暦寺を組み込んだ。

表1 修学旅行の主眼と行動計画

主眼(ねらい)	具体的行動計画
○主体的自主的行動	・京都の班別自主見学
○一流の体験を通して知識視野を広げる	・一流ホテルの宿泊とテーブルマナー。鳥羽水族館の教養セミナー
○友情を深め、旅の面白さを味わう	・テーマパーク
○わが国の産業・文化の理解を深める	・産業見学、古典芸能鑑賞、寺社見学

○集団の一員としての自覚 ・団体行動を通しての時間の厳守、整列、清掃

(3) 学校主導のプランニング

当初から旅行業者にプランニングをまかせ、その中から学校がベストなものを選択する方法は、教官の負担も旅自体の評価へのリスクも少ない。しかし、修学旅行はあくまでも学校主導の行事であるとの考えから、本学年会は準備会発足と同時に議論した当初の旅行目的(学生にはこのような旅であって欲しいとの願い)を実現する条件を旅行業者に示し、その枠の中で出来るベストの計画を学校が選択することとした。

3. 実施までの指導

(1) 学年会の発足

新年度を迎え、学年会では、次の二つの事項について協議し、合意した。

1) 修学旅行基本案の承認(平成7年4月5日)

基本案作成にあたっては、基本方針にあるように事前教育に重点を置いた。

表2 平成8年度修学旅行基本案

1. 修学旅行の目的
(1) 日常の教科活動において学んだ知識を、体験的に学習することにより、歴史、文化、自然風土等に対する視野を広げると同時に、旅を通して豊かな情操を育成する機会とする。
(2) 第二学年のオリエンテーションとして位置づけ、自己を見つめ、友人との語らいの中で、新鮮な気持ちで、新学年に臨む機会とする。
(3) 団体行動を通じ、規律と秩序の必要性を認識するとともに、その活動の中で連帯感を培い、互いの親睦を図る場とする。
2. 基本方針
(1) 目的地選定の理由
21世紀の社会で活躍する学生にとって、国際教育が重要である。その第一歩は自国の理解から始まる。この前提を踏まえて次の通り目的地を選定した。
1) 古都京都を訪ねて、わが国の歴史、文化に対する理解を一層深める。また、歴史的遺産、伝統文化が現代の都市とどのように調和し、息づいているか学習する。国際都市京都の一流ホテルに宿泊し、社会人としての感覚とマナーを体験する。
2) 伊勢・志摩を訪れ、臨海のおおらかな自然と、内陸と異なる人々の生活文化に触れ未知のものとの出会いの楽しさを味わう。
(2) 事前教育
1) 各教科の協力を得て、教科活動及び特活の時間等を通して行う。
2) 自主研修や班別行動にあたって、学生が自ら積

極的に資料を調査し、検討し、計画立案する。

3) 集団行動のルールや、公衆道徳・マナーを養う
良き機会をとらえ、学生が主体的に自己管理できる
体制を作り、その事前指導を徹底する。

4) 事前教育は、一年次後期より開始する。

3. 目的地：京都及び伊勢・志摩

4. 期 日：平成8年5月28日(火)～

5月31日(金) 3泊4日

5. 日 程：

5月28日(火)文化遺産見学及び古典芸能鑑賞

長野→比叡山延暦寺→京都泊

5月29日(水)古都自主研修とテーブルマナー

京都→京都市内見学→京都泊

5月30日(木)ふれあい学習

京都→伊勢スペイン村→鳥羽泊

5月31日(金)コース別見学

鳥羽→伊勢神宮/鳥羽水族館→長野

2) 教官の役割分担

学年会では、次の係を設け、役割を分担し準備を進めた。

①総括：学年主任があたり、総括、学校との連絡調整。

②庶務・学習：学年準備会で決まった学年の旅行係
があたり、企画、学生課や業者との連絡・調整、
旅行関連の特活時間の企画、事前学習、学生旅行
委員会の指導、乗作成の指導、交通輸送及び庶務
全般に関わること。

③生活：旅行中の生活全般に関する諸規則、マナー、
服装に関する指導、宿舍の割り当て・指導等に関
わること。

④会計・記録・緊急対応

⑤看護

④⑤については、教官以外の引率者(学生課職員、
日赤看護婦)に依頼した。

(2) 部門ごとの役割及び実行事項

1) 学年会

①学年会議

学年会は、次の段取りで準備を進めた。

a. 学年準備会の協議内容

1月 修学旅行実施の有無、目的、方針、日程、
方面、係分担の決定。

2月 業者からの見積り、学生課との合同会議、
業者選定、旅行行程案の決定。

3月 実施までの特活の計画検討。学生課との予
算検討、旅行積立額決定。

b. 学年会の協議内容

4月 学生への指導開始(旅行係の選出など)。

9月 学生課と合同会議を経て具体的指導計画の
学年合意。下見の報告をうけ、計画の一部

修正、旅行中の服装、行動、生活に関する
学年の見解と意向の集約。

10月 学校祭中の懇談会を利用し、資料を配付し
て保護者への連絡と周知。

11月 事前学習開始。

2月 班別自主研修への指導(班編成、班別学習
開始、見学地の決定)。

4月 旅行上事務手続き、健康診断チェック、学
生課と連携して対外手続き完了。

5月 引率者合同会議を持ち、乗に基づく最終指
導チェック、打合わせ。

6月 反省、次回へのフィードバック。

②ホームルームでの指導

学年会では、各クラスのホームルームの年間計画
の中に次の修学旅行関係の時間を組み込んだ。

<合同HR>

第1回(11月)修学旅行の概略と準備に向けて。

事前学習「比叡山延暦寺、伊勢神宮の見学の
ポイント」について。

第2回(11月)事前学習「京都の歴史」について。

第3回(11月)事前学習「京都と文学」「旅のエチケ
ット」について。

第4回(5月)結団式(校長、学年主任講話、諸注意)

<クラス別HR>

第1回(2月)、第2回(2月)、第3回(4月)班別学習

第4回(4月)各班の自主見学計画表の提出

第5回(5月)事務手続き

第6回(5月)乗読み合わせ

第7回(6月)反省、アンケート

事前学習は、200人収容の教室を利用し、合同ホ
ームルームの形態をとり、講師は、国語、社会(日
本史)の本校教官及び旅行業者に依頼した。

③下見の実施

平成7年8月29,30,31日に実施した。過去に実施
のない新しいコースであり、見学地の妥当性、移動
時間の確認、危険性の有無、宿舍の適性を観点とし
た。

下見は、以前実施された本校の修学旅行の乗など
を参考に、行動表に基づいて仮の乗を作成し、これ
により学年会係1名、学生課担当者1名でコースを
たどってみた。その結果、ほぼ計画には無理がなく
細部を詰めることが出来た。しかし、計画の再検討、
一部修正が必要となり、学年会は学生課との合同会
議を持ち、次の点を修正した。

a. 祇園コーナーから座禅体験へ

能、雅楽、狂言等7分野の日本の古典芸能を紹介
する体験学習のプログラムは本物の魅力に欠ける

との印象を受けたため、京都の天竜寺での座禅体験へ変更した。

- b. 鳥羽での宿舎がリゾート型のホテルであり、海浜の情緒を満喫できることから、宿でくつろげる時間をより多く設定した。
- c. 日本の宗教史上重要な延暦寺では、歴史的意味の理解を深めるため、延暦寺根本中堂で説明を受ける時間を設けた。

この他に、出発時のラッシュ対策、自主見学の行動範囲も協議題となった。

2) 学生旅行委員会

①組織の確立

委員会は各クラス旅行係2名と正副ルーム長からなり、合計25名で構成した。この中には各クラス女子の代表を必ず含むこととした。

各HRでは、学生が自らの旅行であるとの意識を高めるために、委員がリーダーシップをとり、学生へ説明や連絡が伝達されるようにした。また、旅行先において、学生自らが率先して行動できるトレーニングの場となるよう、委員に次の2つの任務を持たせた。

- a. 合同HRの集合点呼、進行補助。
- b. クラスHRの運営、進行、提案、説明。

委員会内でのそれぞれの役割は次の通りである。

正副ルーム長 一班長を統括—

点呼、移動、行動に関わること。自主見学、事前学習に関わること。

旅行係 一部屋長を統括—

服装、規律、宿舎、整理清掃等旅行生活に関わること。資料や葉作成に関わること。

②葉小委員会の設置

自分たちの旅行であるとの意識を持たせるため、読みやすく、わかりやすい楽しい葉を作ることを目標に活動を開始した。学年会、及び学生旅行委員会の掲載内容事項の要望を受けて企画から印刷まで担当した。また、イラスト、図形処理、パソコン処理等に学生は才能を示した。葉の内容は、B5版、38ページで、携帯に都合よく出来上がった。

③委員会の日程と検討内容

委員は、リーダーとしての任務内容を十分に把握するとともに、協議内容をクラスへ正確に伝えて、またクラスの意見を集約しなくてはならないため、回を重ねる度に責任を自覚し会議の運営もスムーズとなった。

第1回(1995/11/7)委員長・役員決定。任務、予定確認、事前学習準備、旅行への希望。諸注意、服装規律等に関する意見交換と委員意見のコンセン

サスの形成。

- 第2回(1996/1/31)自主研修の意義、原則の確認。作業の進め方、班編成、選択コース検討。
- 第3回(2/8)班編成上の事務手続き並びに学年諸調整、諸注意に関する基本方針確認。
- 第4回(4/10)新年度の予定、自主見学計画の促進、葉内容検討、宿舎(部屋割り等)
- 第5回(4/19)自主見学コース持ち寄り、HRでの協議事項、学年調整。
- 第6回(5/7)諸名簿確認、交通移動の調整、確認
- 第7回(5/15)葉製本作業、葉の内容確認、HRの持ち方について。
- 第8回(5/22)結団式にむけて、旅行の詳細に関する最終確認。
- 第9回(6/6)委員反省会、反省HRの持ち方。
- 第10回(6/7)アンケート整理。

5月17日に学年全体の班長、及び宿舎での部屋長の会議をそれぞれ持ち、予定と任務を確認する。

3) 一般学生

修学旅行の事前学習が深まり、有意義なものになるように次の3つの柱を設けた。合同HRによる学習、葉学習、自主研修である。

自主研修は本修学旅行で最重点の教育効果をねらったことから、計画の段階から慎重に取り組むため、次の通り基本原則が学年会(教官)、学生旅行委員会にて検討され、承認された。

- ①自主研修の範囲は、原則として京都市内とする。京都市を外れて特に見学したい場所のある場合は、その理由を明確にして、担任に予め相談し、許可を得ること。(担任は学年会にはかる)
- ②乗り物は、原則としてバス、電車等の公共交通機関を利用する。
- ③自主研修時間は8:00から17:30とする。
- ④自主研修は班単位で行うこととする。班編成については、4~5名程度とする。班編成は、希望する見学場所を同じくする者同士が望ましいが、各クラスで旅行委員が中心となり、クラスの要望を聞き、担任と相談しながら平成8年2月7日までに編成を完了する。
- ⑤各班は、正副班長を決め、旅行委員に報告する。
- ⑥各班は、班長が中心となって「文学と歴史旅行ガイド京都」等の読み合わせにより、適宜事前学習を深める。
- ⑦各班の班長は、自主研修のコース表(提出用)を4月19日(金)までに旅行委員(ルーム長)に提出する。
- ⑧提出されたコース表は、担任及び旅行者がチェックする。不備な点がある場合は、再度提出を求

められる。

班別学習のために、学生全員に資料『文学と歴史旅行ガイド京都』(152ページ)を購入し、各班には行動のための参考資料『京都のりもの案内・時刻表』を一冊ずつ購入した。また図書館に資料コーナーを設置し、随時利用できるようにした。

班別行動計画表は、次の項目について立案し、2部提出させ、1部は教官の控えとした。

- a. 午前・午後のコース(時間を追って)
- b. 主な見学先(名称)と見学内容
- c. 自主研修一人当たりの経費と内訳(見学・拝観料、交通費、昼食等)

概ね正確かつ、真剣な取り組みで立案されていた。なお、再提出を求められた班は、各クラス10班中2～3班程度あったが、所要交通時間の計算の甘さ、見学箇所の多さ、見学理由の説明不備などであり、見学場所そのものの修正、計画がずさんで全体的に詰めの必要があった班は学年全体で2班のみであった。また、目的地として神戸を設定した班が5つあった。これらは基本原則から外れるが、震災の復興など直接見学したいとの明白な目標が設定されていたため認めた。

(3) その他の配慮事項

この他に修学旅行を成功させるために、学年会は、次の事項にも配慮した。

まず、不参加学生(11名)の指導は、主として留年生であるが、教科担任に課題の提出を依頼し、旅行中の特別時間割りを組み実施した。また教務主事補が学生の出欠記録、課題保管など指導を担当した。

次に、保護者へは、一年次の学校祭中の保護者懇談会と平成8年4月26日付の実施通知文書を通じて宿泊先と指導方針などの理解を求めた。

外部との連絡は、次の4件に関して詳細に行われた。

- a. 旅行先の所轄の警察署、保健所への依頼
- b. 座禅の内容打ち合わせ/依頼
- c. テーブルマナーの方法/内容
- d. 教養セミナー内容検討/依頼

最後に宗教上の観点から、比叡山、伊勢神宮、天竜寺の座禅など、不参加の意志を示す学生が予想されたので、それらへの対応は、慎重にコース選択を設けたり、代替学習などを用意する等配慮した。

4. 実施状況

(1) 実施中の指導のポイント

- 1) 学生の自主性を育てるため事前学習を重視し、旅行中の指示は極力避けた。係は十分責任を持つ

て活躍したが、一般学生の中に依然として係に依存する傾向が見られた。集合時間はほぼ完璧に遵守できた。

- 2) 旅行中は、ミーティングでの打合せを徹底させ、学生の自主管理を求めた。旅行前に校内で班長、部屋長ミーティングを開催し、任務を確認させた。旅行中は学生の委員長が中心となって毎日、旅行委員、部屋長及び引率者のミーティングが持たれた。

- 3) 就寝前の点呼、夜間巡視は教官が行った。この時点で問題はなかったが、アンケートによると夜中まで起きていた者が多く、就寝時刻の徹底は指導の限界をこえることを痛感した。

(2) 今回の実践方法に関する反省

行動に関する実態のアンケート結果(表3)に示されるように、学生の主体性を尊重することで、予想外に責任のある行動が見られた。このことは修学旅行の目標をほぼ達成したと考えられ、これまでの教官が表に立ち指示を出しすぎた感のあったことを反省させられた。学年会及び学生旅行委員会の反省会で出された感想は次の通りである。

1) よかった点

- ①委員の責任感が高く、HRでの説明、班編成、乗車割りの調整等に当たった。また旅行中、乗り物や宿舎での学生間のトラブル解決にあたるなどリーダーシップを養うよき機会となった。クラスを越えた人間関係の生まれる場ともなった。
- ②自主見学コースの立案については、HRの時間では間に合わず、班長を中心として熱心に研究する班もあらわれた。予約の必要な寺社見学等にも積極的に係わった班も生まれた。
- ③公共交通機関を利用して行動したが、帰館時刻に遅れた班はなく集団行動の自覚が高まった。
- ④座禅、テーブルマナーの体験学習はTPOにおける大人のマナーのあり方が勉強できたとの感想が多く聞かれた。
- ⑤水族館見学においても、まず予備知識を教養セミナーの形でおよそ1時間講義を受けた後見学したことは、有意義であった。
- ⑥策委員会では、各委員がパソコン等のテクノロジーとイラストなどの特技を生かして積極的に編集に参加した。

2) 今後の課題

- ①旅行委員の熱意のわりには、一般学生の自覚の高まりがいま一步であった。各クラスの係は責任を自覚し、熱心にその任務を遂行したが、その一方で自分の座席、行動予定をその場で聞くなどして

- リーダーによりかかりすぎた一般学生も見られた。
- ②二年次の教科の学習内容、進度とうまくからまず、事前学習がその割に深まらなかった。このため、学生同士では見学場所の絞り込みが十分できなかったり、見学が上滑りに終わってしまった感もある。
 - ③HR等の進行と説明がすべて学生の手により行われたため、いま一つの徹底に欠けた。
 - ④担任の負担軽減に比して、学生旅行委員を指導する係となった教官の負担が倍増した。

5. アンケートに見る学生の満足度

(有効回答数209名、回収率99.5%)

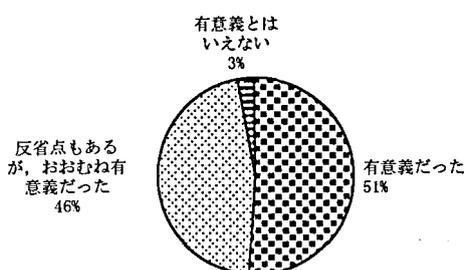


図1 修学旅行の意義について

表3 行動に関する実態

項目	はい 割合(%)	いいえ 割合(%)
旅行の葉が役に立った	186 89.0 人 %	23 11.0 人 %
旅行の葉を良く読んで行動した	129 61.7	80 38.3
京都自主見学の計画は十分だったか	90 43.1	119 56.9
京都自主見学は計画通りできたか	182 87.1	27 12.9
移動中の車内での行動は適切だったか	186 89.0	23 11.0
ホテルでの行動は適切だったか	179 85.6	30 14.4
起床時刻に起きることができたか	161 77.0	48 23.0
就寝時刻を守れたか	72 34.4	137 65.6

■大変有意義 □少し有意義 ▨あまり有意義でない □意義がない

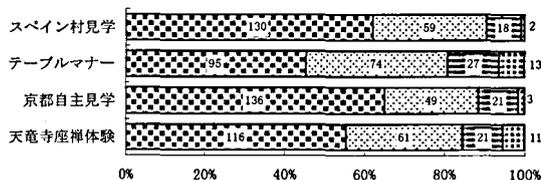


図2 見学事項に関する感想 (数字は人数を示す)

表4 修学旅行の良い点 (複数回答)

項目	人数
知らない土地へ行ける	163
娯楽として楽しい	136
友人関係が深まる	114
広い見識を持つことができる	84
いつも食べられない料理を楽しめる	69
自主的に行動ができるようになる	65
お土産を買うことができる	58
規則正しい生活ができる	12

表5 修学旅行の悪い点 (複数回答)

項目	人数
保護者の経済的負担が大きい	79
旅行の準備が大変である	54
友人関係が悪化する	45
普段の学習が中断される	33
旅行中の規則が多く、自由が束縛される	32
規則正しい生活が乱れる	25
引率教官の負担が大きい	23

6. 考察と今後の展望

長野県内の高校の修学旅行は形態が多様化している。従前通り団体で一斉に実施する学校もあれば、クラス旅行の形態をとり、最終日に学年全体が一ヶ所へ集合する旅行もある。また学校行事から削り取ってしまった例もある。その目標も修学旅行を国際理解教育の一環として位置づけ、海外に行き先を求めたり、広島、長崎、沖縄等を訪れ平和教育に資するものもある。

では、高専の修学旅行はどのような意味付けがされるべきなのか。工業高専において、すぐに役立つ実践的技術者の養成という目標を掲げてきた5年間教育は、ともすれば人間形成が見落とされがちになる。この認識の上に立ち、修学旅行が学生の自主性や社会性を育てる一つの機会となるならば、その価

値は軽視できないはずである。

我々の旅は、その目的地以上に、事前学習、計画立案と旅に至るまでのプロセス、その実施方法に、常に学生が主体となって行動することに最大の焦点を当てたものであった。

今回の試みの中で設定した幾つかの機会を通して、彼らは中学時代とは異なる行動が要請されることを認識し、仲間やクラスが存在にも目を向けるようになったことが感じられる。均質でない人間同士のつながりの難しさと重要性とを、各人が何らかのかたちで感知しことを疑わない。とりわけ修学旅行委員を経験した25人は得難い経験を積んだといえよう。

本校の修学旅行は従来の秋期の実施から春期の実施となった。今回も5月の連休を終え、各種行事により一週間きざみで授業が分断された後に実施された。終了後も一週間後には前期中間試験が続くといった忙しいスケジュールで、まさに行事の間を縫っている思いであった。

加えて、過密なカリキュラムと学生生活のなかで、埋没している彼らの自主性・社会性を回復する方法として、修学旅行は学生、教官に対し多くの労力を要求する学校行事であることも事実である。ほとんどの高専で修学旅行が行われていない現実も看過することは許されないだろう。

このような中で二年次の修学旅行を意義深いものにするのは、5年間を見通したカリキュラムの中で、特別活動の再評価・再構築が必要である。すなわち、修学旅行を高専教育における二年次のオリエンテーションとして、学生が主体的に旅行に関わっていく

というテーマ設定であり、学生生活全体を通して「自主的、主体的に物事に関わる」態度を育む機会とする、換言すれば生徒から学生へ脱皮させるという位置付けである。

アンケートの結果からも、当初の目標を達成できたように思う。5年間一貫教育のカリキュラムの中で青年前期の人的成長を援助する特別活動が果たす役割を再吟味し、修学旅行という学校行事を通して実践した今回の試みは、今後継続されるであろう本校の修学旅行のあり方に一石を投じたと自負している。学校行事も日常生活の延長としてとらえ、毎日の教育の場における、地道な教育実践を重視し、5年間一貫教育の高専の特徴を生かして、学生個人にかかわりあっていく継続的な努力も忘れてはならない。

(注)

- 本校の一・二学年のクラス編成は、昭和49年4月から各科混成(混合学級)である。
- 平成8年度第二学年修学旅行参加者 222名
学生210名(男子174名, 女子36名)
教官6名, 事務官2名
看護婦1名, 添乗員3名
- 修学旅行経費の概略
学生一人当たり81,550円
<内訳> 宿泊費46% 交通費30%
 入場拝観料 7% 昼食代 4%
 諸経費(保険, 写真, 有料道路等) 4%
 その他(手数料, 図書, 印刷等) 9%